様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　　５月　１０日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2007～2011
課題番号：19254003
研究課題名（和文）
　ベロットの風景画の景観ネットワークを元に修復されたヨーロッパ諸都市の土地利用調査
研究課題名（英文）　Landuse Survey of the Restored European Cities based on Landscape Network found in Paintings by Bernardo Bellotto
研究代表者
　　萩島　哲（HAGISHIMA SATOSHI）
　　九州大学大学院人間環境学研究院・名誉教授
　研究者番号：70038090

研究代表者の専門分野：工学
科研費の分科・細目：　都市計画・建築計画
キーワード：景観デザイン、地区修復、ベルナルド・ベロット、ドイツ：イタリア：ポーランド、景観ネットワーク、３DCG

１．研究計画の概要

　本研究課題は、ベルナルド・ベロットが描いた風景絵画を基にして修復・保全してきた都市にしぼり、その視点場の現地調査を行い、ベロットの絵画と実景との比較、絵画の典型的構図、絵画が街づくりに如何なる面で寄与したのか、どのようなプロセスで絵を元に修復が可能になったのか、その傾向を、明らかにすることである。

　調査対象の都市は、ヴェネツィア、ドレスデン、ピルナ、ウィーン、ワルシャワなどで、それぞれ独自の都市計画的手法が展開されているが、絵画を通して修復を行っていることは共通しており、その中に共通の傾向を探ることも長期的な課題と考えている。

２．研究の進捗状況

　以下に現段階までの調査結果を示す。

(1)ベロットの叔父カナレットが描いた絵画の視点場を調べると、複数の視点場から描かれており、デフォルメされていることがわかった。

(2)ベロットの絵画の構図的特長としては、①市街地の街並みの景観、②河川と街並みの景観、③街の全貌を見渡す景観、④宮殿の景観の４つの基本的構図が見出せ、その中にはカナレットの影響をうけて複数の視点場から描いている絵画も存在していることが分かった。

(3)絵画に描かれた添景については、河川や庭園などのオープンスペースを描く時には船舶や人物などを添景として多く描き、水視率を低めまた奥行きを強調するために配していること、さらに添景に描かれている人物の服装を細かく観察すると、当時の宮廷生活の一端が描かれていることが分かった。

(4)第２次大戦で破壊された市街地の復興・修復の際に、ベロットの絵画が重要な役割を果たした。ピルナ、ワルシャワ、ドレスデン、それにウィーンでは、当時の建物の様子が絵画で残されているために、建物やその色彩が、修復のテキストとして活用された。ワルシャワでは、1700 年代に描かれた絵画が、今日でも修復のテキストとして活用されていることは驚異であった。

　ベロットを活用した背景を、聞き取り調査によって確かめてみると、行政主導でありながら NPO と住民のサポートによって、ベロットの絵画の重要性が支持されてきたことがわかった。

(5)ピルナ市は、高齢化が進行し、若者は郊外への移住が多く、中心部での空洞化が進行しており、行政担当者は、景観街づくりから観光街づくりへの展望していることがわかった。

(5)私どもの研究成果の１つとして、ピルナの歴史地区（300×500m）を、アイ・レベルからマクロ・レベルまでカバーできる３次元コンピュータグラフィックスで再現した。次年度には、それをピルナ市へ提案、観光資源の１つとしてピルナ市の展示ホールで公開されることが期待されている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

(理由)

(1)課題の１つであるベロットが描いた基本的構図の把握、実景と絵画の比較については、十分に把握できている。
(2)ワルシャワとピルナへの行政、NPO への聞き取り調査によって、ベロットの絵画が復興と修復に果たした役割が大きかったことがわかった。
　絵画には建物のきめ細かい部分まで描かれており、建物の色彩も残されており、それをテキストとして木製サッシュの色やガラスのデザインまで参照して修復してきたし、今後も修復していく、という担当者の発言が印象的であった。
　ドレスデンでは、各時代に対応した建築様式があり、一部はベロットにこだわるにしても、全体として 18 世紀、19 世紀、20 世紀とそれぞれの時代の残されてきた建物を尊重していく、というのが基本であるとした。
(3)ピルナの土地・建物調査もほぼ終了し、３DCG での再現も可能となっている。
(4)現地調査を行う過程で、ベロットの作品が 4 点新たに見つかっている。その調査が次年度に残される。
　以上のように全体としては、計画通り進行している。

４．今後の研究の推進方策
　最終年度に向けては、調査の総括を行うための補充調査を中心に研究を推進していくが、主たるものは以下である。
（1）ワルシャワ、ウィーン、ドイツ・ピルナへの聞き取り調査
　ワルシャワとウィーンの都市計画局、文化財保護局、さらにウィーンでは美術史美術館への聞き取り調査も行う。また、ベロットが描いた教会などのインテリアの意匠の撮影、歴史資料の収集を行う。
（2）新しく見つかったベロットの絵画の視点場の現地調査
　フィレンツェ、ベローナ、バップリオ・ダッタ、ミラノの４箇所である。視点場の位置の確定と周辺空間の計測、画角、主な視対象までの距離と高さの計測、写真撮影などを行う。
（3）ピルナ市での３DCG による再現の発表会の実施
　既に発表会の日程等についてはピルナ市と打ち合わせ済みである。使用ソフト Autodesk 3ds Max による再現のプレゼンテーションと、現地で継続的に操作可能なのかどうかをチェック、さらにプレゼンテーションの表現・内容についての注文によって改善を図っていくことになり、内容と操作性についての検討をすることになる。検討を踏まえて改善した CG を、最終的にピルナ市へ寄贈することになる。
(4)以上の調査と今までの調査研究の内容を総括して報告書を作成する。

５.代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
①小川勇樹、<u>趙世晨</u>、<u>萩島哲</u>：３DCG による都市風景画に描かれたピルナの都市景観の再現に関する研究、都市・建築学研究、有、17、1-9, 2010
② Yuki Ogawa, <u>Shichen Zhao</u>, <u>Satoshi Hagishima</u>: A Study on the Unity of Urban Landscape in Pirna in the Suburbs of Dresden, Germany, Proc. 7th Int. Sympo. on City Plann. and Environ. Management in Asian Countries, 有、pp.233-240, 2010
③ 松永一郎、<u>黒瀬重幸</u>、花崎正子、<u>趙世晨</u>、<u>萩島哲</u>：ベロットが描いたウィーンとミュンヘンの風景画の構図と添景の解読、都市・建築学研究、有、17、11-25, 2010
④内田晃、有馬隆文、<u>趙世晨</u>、<u>萩島哲</u>：ベロットが描いたワルシャワの風景画の構図と市街地修復過程に関する一考察、都市・建築学研究、有、14、7-17, 2008

〔学会発表〕（計４件）

〔図書〕（計１件）
①<u>萩島哲</u>：カナレットの景観デザインーヴェネツィアを読むー（発行確定）、技報堂出版、178、2010

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
http://z-lab.arch.kyushu-u.ac.jp/project3.htm
Sachsische Zeitung 紙　2009 年 8 月 1 日付け、ピルナ調査について掲載された。